# 合縁奇縁 えんとつ山を見てきた先人

## Ⅰ 序章

これは、えんとつ山を見てきた先人の物語です。
登場する人物は、
　えんとつ山を築いた　広瀬 宰平（1828～1914）、えんとつ山の煙を見て青雲の志を持った　田宮 嘉右衛門（1875～1959）、えんとつ山の麓に新しい町を造った　鷲尾 勘解治（1881～1981）
この3人の産業人に加えて、
　近藤 廣仲（1897～1998）、寺尾 国義（1928～1992）、真鍋 博　（1932～2000）、松田 雅夫（1932～1989）、藤田 元司（1931～2006）である。

## Ⅱ 明治21 年えんとつの煙上がる

時は明治21年（1888）11月21日、住友家総理代人広瀬宰平（1828～1914）は、別子の銅鉱石の特性を利用した硫酸などの化学物質の製造と鉄分からの製鉄のため、山根製錬所を造り操業の煙を上げた。その五年後には角野にわが国初の山岳鉱山鉄道の噴煙が上がる。誰もが度肝を抜かれた。いったい、何が起こっているんだ。別子鉱山がいよいよ盛んになるが、麓の「角野」はまだまだ農村であった。
立川の分店屋敷にのちに神戸製鋼中興の祖といわれる田宮嘉右衛門（1875～1959）と角野の町長となる近藤廣仲の父である近藤鹿松は生まれ、共に学ぶ仲であった。嘉右衛門は、四男で6番目の子どもであった。嘉右衛門が栄明小学校を卒業する直前、父治助が亡くなった。進学意欲のあった嘉右衛門は悩み、瑞応寺の先祖の墓前で終日泣いて暮らした。この頃、近藤鹿松は別子鉱山鉄道の運転手として勤めており、嘉右衛門は鹿松の運転する電車に乗ったものであった。
えんとつ山から吹き上がる煙を眺めながら、珠算、暗算が得意であった嘉右衛門は、人々が競い合っている都会で仕事がしたいと、青雲の志を持っていた。

## Ⅲ 鐵の巨人

田宮嘉右衛門揮毫　金子直吉の句碑
（金子山・滝宮公園）

小足谷尋常高等小学校を卒業した嘉右衛門は、二年間分店屋敷で日給傭員として働くが、燃え盛る青雲の志を抑え切れず明治25年のある日、いよいよ大阪に行くのである。嘉右衛門は大阪市北区役所庶務課、神戸商品取引所を経て、広瀬宰平の口利きで住友樟脳精製所工場に勤めるのである。しかし、住友樟脳は経営がうまくいかず嘉右衛門の生活は楽ではなかった。時に、台湾総督府と組んだ鈴木商店金子直吉は、三井・三菱すらしのぎ隆盛の勢いであり、住友樟脳精製所を買収。失業していた嘉右衛門を新しい工場へと誘う。金子は、その苗字が示すとおり、戦国時代、新居浜の城主であった金子備後守の子孫にあたる。何という縁。
当時、樟脳会社は激烈な企業間競争があり、秘密保持の原則があった。嘉右衛門は恩師が別な会社で樟脳を扱っており、この恩人を裏切ることができず、金子直吉の誘いを断った。金子直吉はこの時のことを覚えていて、田宮嘉右衛門とはいかに律儀で誠実な男かと認識した。しばらく時が経ち、金子直吉は、台湾での樟脳専売制に目をつけすぐに行動に移した。同時に、嘉右衛門に再度手紙を送り、鈴木商店で働かないかと積極的に誘った。嘉右衛門は、樟脳の秘密保持の原則がなくなった事情があり、誘いに応じて、鈴木商店樟脳精製工場に入社した。
明治38年、嘉右衛門は、鈴木商店が買収した神戸製鋼所に支配人として就任する。その後五十四年に渡り鐵の世界で闘い、関西鉄鋼業界大御所となる、鐵の巨人の誕生である。
明治44年には鈴木商店より分離独立した株式会社神戸製鋼所の常務取締役となる。昭和3年専務取締役、昭和9年には社長に就任。田宮嘉右衛門は、幾多の困難を乗り越え、神戸製鋼を大企業とし、中興の祖と呼ばれる。その実業家としての手腕は素晴らしく、数多くの企業を育てた。

## Ⅳ 新居浜後栄策 昭和通り

自彊舎記念館（元塚）

田宮嘉右衛門が大阪に行ったあとの角野に、鷲尾勘解治（1881～1981）は、住友別子鉱山で働く若い職員を教育する場である、別子山や東平でも開いていた自彊舎を移す。巨大な社宅群を開き、相撲場、400メートルトラックの備わった陸上競技場、長屋群には不釣合いな瀟洒な温泉施設を含んだ倶楽部を建設する。えんとつ山の麓に新しい町を造ったのである。
時を同じくして、金子直吉と縁を結んだ政治家後藤新平は、外務大臣などの要職を歴任後、大正9年には国政を離れ東京市長として、帝都復興の都市計画を造った。その都市計画のひとつとして、60間（約108メートル）もの巨大な道路を抜こうとしたが、反対が多くその広さの道路を断念している。道路は昭和3年に完成。その名も「昭和通り」という。
どこかで聞いた話ではないか。何もないレンコン畑の間を当時の地方都市としては考えられない8間（約14．4メートル）の道路を抜こうとして猛反対を受けたため断念し、抜いた6間の道路が今も残る。昭和6年に完成した新居浜市の「昭和通り」である。考えたのは、住友別子鉱山の常務取締役であった鷲尾勘解治。土地の買収は、新居浜町があたり、建設経費は住友が負担、住友職員の作務により成し遂げられる。
「住友はこの地に銅山に代わるべき事業を興し、その事業が栄えてこそ新居浜の繁栄が期待できる」と、この道路に架かる橋に鷲尾は願いを込め「共存」「共栄」「申孝」と名付ける。鷲尾勘解治の新居浜後栄策のひとつである。

## Ⅴ 角野にて

近藤鹿松の息子、近藤廣仲（1897～1998）は角野の恩人といわれる。新居浜市の名誉市民にもなる廣仲は、角野町収入役、助役、町長を経て、県議会議員を20年勤めた、地域の恩人である。その後、新居浜商工会議所会頭、愛媛県商工会議所連合会理事、新居浜市観光協会会長など商工業はもとより県内諸産業の発展に尽力した。
俳人河東碧梧桐が、昭和5年桜の咲く頃、ふらっと角野にやってきた。この時、廣仲は伴をして、端出場や生子橋を案内する。この時に碧梧桐が詠んだ句、「君を待たしたよ　桜散る中を歩く」の句碑が、碧梧桐自身の字でえんとつ山の麓に建立されている。
廣仲にとって生涯忘れえぬ出来事が起こった。昭和25年の天皇陛下愛媛県行幸である。3月17日角野小学校校庭に陛下御一行が到着した。晴れ渡る空の下、角野町長近藤廣仲は、陛下をお迎え申し上げた。廣仲は、陛下の1メートル前を先導して歩き、奉迎台にご案内申し上げた。陛下の笑顔が終生脳裏に焼きついた。

河東碧梧桐（真中）と近藤廣仲（右）
（打除付近）

晩年に、近藤廣仲が『別子銅山風土記』を出版する際に、写真構成を頼んだ人物がいた。寺尾國義（1928～1992）である。寺尾國義は住友化学に勤めていた時から、アマチュアカメラマンとして活動していた。以後、国内の写真コンクールに入選入賞を重ね、昭和57年カメラ毎日年度賞、二科展初入選（以後4回連続で入選）し才能を開花させる。
住友化学を退社したあと、プロのカメラマンとして本格的に活動を始める。四国山村を撮り続けたその作品『四国山村風土記』は一級の芸術作品である。寺尾國義の撮影した、鹿森社宅や角野新田社宅、角野の町並み、新居浜の風景は懐かしい記憶をいつまでも残してくれている。

## Ⅵ 芸術家たち

四国文明圏
（真鍋博　昭和 63 年）

金子直吉が、台湾で台湾総督府後藤新平に縁を結んだ当時、もうひとり、台湾で後藤新平と結びついた男がいる。粗製モルヒネの払い下げを一手に引き受け、その後もアルカロイド薬品により「製薬王」とまで呼ばれる。星一である。星一は有名なSF作家、星新一の父である。
星一の息子星新一は、『人民は弱し 官吏は強し』の中で父と後藤新平を描いている。星新一は、父が亡くなった後の星製薬を継いだが、事業は上手くいかずに他人に会社を引き渡した。その後江戸川乱歩に認められて作家デビューを果たし、「ショート・ショート」と呼ばれる新しい小説のあり方を開拓、日本を代表するSF 作家となる。その星の挿絵を多く手がけたイラストレーターがいる。真鍋博（1932～2000）である。

自転車賛歌
（真鍋博　昭和 48 年）

星の贅肉をそぎ落としたような一読すると冷たいように感じる作品の中にある底の部分の暖かさと、真鍋の精密画のような細い線の中にある自然やエコロジーに満ち溢れた作品は、作家とイラストレーターといった関係を遥かに凌駕する世界へ私たちを導いていってくれる。真鍋博の挿絵と星新一のショートショートが描く世界は共に昇華し生まれたもの。それは邂逅の宿命であるかのごとく、二人は友人という概念を遥に越えたジンテーゼである。
未来画を数多く描いた真鍋であったが、昭和43年には『鳥の目』を発表、鳥瞰で都市を見ている。　真鍋が昭和63年に描いた『四国文明圏』には既に四国8の字構想が描かれており、都市計画の視点の確かさが伺われる。国土交通省（当時建設省）の景観委員も勤め、自転車の愛好家として知られバイコロジーを提唱、「ゆっくりずむ」を推奨する。
真鍋の中萩中学校時代の一年先輩にウインドウディズプレイの先駆者で実業家であった松田雅夫（1932～1989）がいる。松田は、金沢の美大を卒業したあと、東京でデザイナーとして日本航空の専属となる。ここで、松田雅夫のウインドウディスプレイは確立され、商業デザイン界に一時代を築き上げるのである。日本航空のウインドウディスプレイで成功した松田は、会社を興し、西武・三越・帝国ホテルといった一流企業の商業デザインを手がけ、実業家としても成功する。

## Ⅶ 巨人の星

巨人軍監督時代の
藤田元司

えんとつ山を足腰の鍛錬のためにうさぎ跳びで飛び跳ねて登っていた少年がいる。背番号18が最も似合う巨人軍のエース、藤田元司（1931～2006）である。少年時代のやんちゃなエピソードは数知れない。そんな少年が、「球界の紳士」といわれ、「名選手、必ずしも名監督にならず。」といった格言が流布する厳しい世界で監督としても日本一の栄誉に2度も輝き、野球殿堂入りを果たすまでになる。大変な努力があったに違いない。藤田と真鍋は、同郷で同世代ということもあり、意気投合した二人は「終生の友」であったと聞く。

## Ⅷ 終章

山根大通りストリートミュージアムに登場する人物は、「合縁奇縁」によって結ばれる。近代史が開化される明治から昭和へと、先人たちは新居浜から始まる大きな足跡を残し、平成の新居浜が続いている。

（文中、敬称略）
原案：安孫子 尚正／横井 邦明
校正：安孫子 尚正／横井 邦明
デザイン構成：安孫子尚正

（写真協力）
住友史料館／別子銅山記念館／自彊舎記念会／新居浜市／読売巨人軍／株式会社神戸製鋼所

（写真引用）
近藤廣仲傳清流不儘／田宮嘉右衛門伝／松田雅夫遺作展パンフレット